六月

木津川昭夫

今宵凶暴な心は独り怒りとなり
燐光となって　狂おしく燃えた
呆然と夕の嘆く薄暗い部屋の片隅に
欲望は灰色の布となって垂れ下がった

眼球に投射する六月の滴たる緑
北国の黒ずんだ低い屋根屋根や
鈍色に光の沈んだ重い空に
喪失に悩む不安な風景がめくれる

牡丹花を揺するそよ吹く風
鈍重に錆びついた馬車の轍
指を開く針葉樹の痩せた青春
欠けた花瓶の側には爪を噛む燈

その時　ざわめきの立ち昇る
おびただしい生活の斜面から
翼もつけず一体何か降りたのだろう
暗い心にぎらりと光る激越な夜を抱いて